

# 俳句同好会

星野委員

文化厚生委員会の事業として昨年九月に俳句同好会を発足以来、この七月十七日に第十回を開催することが出来ました。この間に参加または投句参加された方は次の通りです。



大和電設工業(株) 棚谷 四朗  
 (株)淀電機水道工業所 田中 生雄  
 住友電設(株) 藤澤 一雄  
 同和電工(株) 林 治吉  
 (株)オリヂナル電設 石崎 陵南  
 光星電工(株) 久保 白楊  
 東海電気工事(株) 新谷 景流  
 長谷川電気(株) 長谷川松蔵  
 京都府電気工事工業組合 三木 一義

(第四回) 事務 局 星野 紫杏  
 吹ノ戸月耕  
 於…協会事務局  
 一月二十四日(土)

兼題『年末・年始』 幹事 吹ノ戸月耕  
 初春へ つなぐ火縄で 輪を画き 松蔵  
 年賀状 いくたびも見て 寝正月 月耕  
 刀自若し 花びら餅を す、められ 白楊  
 ざわめきを 福笹に抱き 露路曲る 白楊  
 寒燈の ゆらぐ暗さや 不動尊 景流  
 箸紙に 孫の名しるす 墨を磨る 白楊  
 十三日 新巻一尾 到来し 松蔵  
 初春や 河原に風が 二つ三つ 松蔵  
 人の背に 手を合はせてる 初詣 紫杏  
 かき餅を 賑ぐ爐の 着ぶくれし 景流  
 初戎 椎の実バック 売る夜店 景流  
 席題『早春 梅 芽える 凍てる』  
 山茶花の こぼれる径に 友と逢う 景流  
 溝越えて 梅咲く墓地を 近道す 白楊  
 梅の香に 誘われ出て 襟合す 四朗  
 芽えかえる 露路にボクリが 遠ざかり 四朗  
 昂凍て、 わが青春の 日もありき 白楊  
 濁り澤 凍て石蹴れば 波紋せり 景流  
 ほろ酔いて 寒梅白く 目にしみる 治吉  
 磴の なかば駒下駄 芽え返り 景流  
 露路芽えて 客足速に 遠ざかる 紫杏

## (第五回)

於…協会事務所  
 二月二十一日(土)

兼題『早春』 幹事 新谷景流  
 春浅く 還暦前の 友の逝く 陵南  
 おうおうと 托鉢の声 春寒し 白楊  
 箸の手で 新聞めくる 蜆汁 白楊  
 裾寒し そばの七味を や、多く 白楊  
 節分に 同じ思いの 二人づれ 松蔵  
 山茶花の 散りて色恭う 枯芝生 紫杏  
 軒下を 通れば頸に 雪解水 紫杏  
 春浅し 鍋に水菜と 皮鯨 松蔵  
 合格の 祈願をこめて 初天神 月耕  
 春浅し チェーン外して 車去り 月耕  
 追憶の 日の遠くなり 梅の里 四朗  
 春浅し 北側の屋根 白くして 四朗  
 席題『初午』『水菜』『風船』  
 肩車 風船一足 先をゆく 紫杏  
 下鳥羽に 一人おうなの 水菜かり 松蔵  
 初午の 建替鳥居 朱々と 松蔵  
 風船が われて四五人 ふり返り 松蔵  
 山積みの 水菜にさらに 水かけて 白楊

## (第六回)

於…協会事務所  
 三月二十八日(土)

兼題『木蓮 辛夷 木ノ芽』 幹事 久保白楊  
 一天を 見つめて寂し 夕辛夷 一義

## (第七回)

於…御室仁和寺境内  
 四月十八日(土)

吟行 幹事 星野紫杏  
 鐘楼へ や、傾ける 糸桜 白楊  
 山門の 仁王は見るだけ 花見酒 紫杏  
 八重一重 花にかくれて 御影堂 松蔵  
 風鐸の 一つこわれて 花の塔 白楊  
 暈の陽の 下の御室寺 花の句座 景流  
 塔頭は 花を背にして 静もれり 一義  
 盃に 膝の落花を 拾いけり 白楊  
 それらしき 宗匠頭巾 花に酔う 白楊  
 この盃に 一ひら落せ 花の昼 一義  
 今しばし 吹く春風 御室寺 生雄  
 散る桜 残る桜も 御室寺 景流

席題『花ぐもり』  
 一巡り 二巡りして 花ぐもり  
 鐘いとう 花の仁和寺 花ぐもり  
 鬼踏める 多聞の足や 花ぐもる  
 花ぐもり 床几床几の 家族づれ  
 扁額の 梵字あせたる 花ぐもり  
 生雄  
 紫杏  
 白楊  
 月耕  
 白楊

(第八回) 於…伏見稻荷神社境内

五月九日(土)  
 吟行  
 榊の 若葉まばゆし 神手水  
 鳩むれて 木陰に移る 薄暑かな  
 巫女の舞う 神楽に 風の薫りけり  
 初夏に舞う 巫女の手白く 袴は赤く  
 丹の鳥居 万緑に映え 千社抱く  
 風薫る 神楽殿午后 巫女の舞  
 丹の鳥居 鳥居の間の 青葉かな  
 参道の 若葉をぬけて 風渡る  
 水をまく 門前町に 薄暑はや  
 神楽殿 さわやかに初夏 巫女二人  
 星野紫杏  
 幹事  
 白楊  
 紫杏  
 一義  
 松蔵  
 景流  
 景流  
 白楊  
 紫杏  
 一義  
 松蔵

(第九回) 於…協会事務所

兼題『五月雨 五月晴 五月闇 かえる』  
 六月二十六日(金)  
 五月雨に ついに怠けし 月詣  
 幹事 久保白楊  
 白楊

測掩う 青葉楓に 雨蛙  
 五月雨に 一日灯して 漢書読む  
 真直に 天降る絮 五月晴  
 五月雨の 去りて街騒 よみがえり  
 青蛙 香脱に居て かしこまり  
 孫待ちて 水屋の菓子に 徴が来る  
 席題『紫陽花 噴水』  
 あじさいの 盛りに雨戸操り開ける  
 噴水の 間断ありて 陽の高し  
 紫陽花の 鞠の向に 猫の貌  
 紫陽花の 色鮮やかに 雨に濡れ  
 景流  
 白楊  
 白楊  
 一義  
 松蔵  
 松蔵

(第十回) 於…KPC会館

兼題『汗』  
 七月十七日(金)  
 走り来る 汗の尻何を 見せんとて  
 背をつたう 汗にもなれて 借り畑  
 挨拶の 言葉も出でず 汗拭う  
 先づ汗を 案内されたる 田舎井戸  
 友癒えて 句座の端占む 夏の宵  
 汗滴 垂らしバターを 見定めり  
 夢心地 初優勝に 汗さやか  
 冷汗に かわり駆け込む 避雷小屋  
 作業衣に 汗にじませて 命綱  
 汗ぬぐう 六十路にためらい なかりけり  
 汗替えし 新湯で流す 今日の汗  
 新谷景流  
 幹事  
 白楊  
 一義  
 白楊  
 白楊  
 一義  
 松蔵  
 景流  
 景流  
 白楊  
 景流  
 景流  
 月耕  
 月耕  
 一義  
 紫杏

# 俳句同好会

星野委員

皆様より多大の協力を得まして俳句同好会も回を重ね、昭和六十二年末までに第十回句会を開催することが出来ました。今后とも春秋の温暖な良い日を選び、洛中洛外の名勝を訪ね吟行による句会を行いたいと考えています。会員の皆様の内でも少しは俳句に興味をお持ちの方は繰合せ御参加下さい。多忙のため参加不能の場合は、協会事務局まで、電話で連絡の上ファックスで投句による参加をお待ち致しています。

(第十一回)

於…協会事務所  
九月十八日

兼題『火花』『朝顔』『水瓜』『盆』『残暑』『季節雑詠』

幹事 吹ノ戸月耕

朝顔の 日替りに咲く ろ路通る  
軒下の ねずみ火花に 孫は泣き  
朝顔の 日々に花敷 減らしけり  
歩度計の 音数えつ、 秋暑し  
花笠に 似て大空の 煙火かな  
遠花火 天王山は 闇のま、  
朝顔の 明日咲く花を かぞえけり  
堰堤の 仕掛火花の 散り果てぬ  
病癒え 朝顔のなき 庭に佇つ  
百日紅 燃える木の下 地蔵尊  
送り火や 母の齡に 近づけり  
たな落ちの 西瓜をかこつ 妻の顔  
蟻が引く 蟬の骸や 城公園

紫杏 松蔵 景流 白楊 紫杏 一義 松蔵 景流 月耕 一義 紫杏 陵南

(第十二回)

於…協会事務所  
十月七日

兼題『秋桜』『萩』『秋祭り』『百舌』『季節雑詠』

幹事 新谷景流

花蓼の 食卓に垂れ 独り酒  
托鉢の 声澄み渡る 萩の道  
指呼の後 駅長コスモス 手折りけり  
宴果てず 神何おぼしめす 村祭  
百舌鳥一声 尾を上下して 見おろさる  
鵬鳴いて 蒼弓の青 深めけり  
安産の符を授かりてて 萩の道  
括られし 萩の陰なる 濡れ佛  
晝静か こぼれしまゝに 萩の坊  
青い眼の 托鉢僧行く 萩の道  
にわか雨 花傘に倚る 秋祭り  
席題『神の留守』『柿』『障子貼り』  
鴉啼く 里わ昏れ初む 木守柿  
障子貼り いそしむ妻に 白髪見ゆ  
焚火跡 雨に濡れたる 神の留守  
木もれ陽の 影をやどせる 新障子  
舌先に 澁味とゞめし 走り柿

白楊 陵南 白楊 一義 景流 景流 白楊 一義 陵南 陵南 一義 景流 紫杏

(第十三回)

於…嵐山 嵯峨の庵  
十一月二十一日

兼題『紅葉』『時雨』『大根』『蓮根』『小春』

幹事 星野紫杏

吟行『嵐山渡月橋より清涼寺大覚寺を経て嵯峨の庵』  
大根手に 笑顔の続く 立話  
蓮根や 菌切の音に 夜酒くむ  
大川の 片しぐれして つなぎ舟  
逆光の 一直線に 紅葉映ゆ  
大根の 葉つきのまゝで 投げ置けり  
渡殿に 添ひし紅葉の 片かけり  
手水井に 三つ四つ浮いたる 紅葉かな  
比叡越し 近江へ急ぐ 時雨かな  
外野手の 子が手を上げる 大根畑  
大橋の 時雨托鉢 や、急ぐ  
甘酒に 紅葉うつして 箸一つ

一義 紫杏 白楊 景流 白楊 一義 紫杏 陵南 白楊 松蔵

以上第十一回から第十三回までの参加は次の通りでした。

オリジナル電設(株) 石崎 陵南  
光 星 電 工(株) 久保 白楊  
東海電気工事(株) 新谷 景流  
長谷川電気(株) 長谷川松蔵  
トモエ屋 星野 紫杏  
京都府電気工事工業組合 三木 一義  
事務局 吹ノ戸月耕

# 俳句同好会

## 星野文化委員

年が改まってからも同好会々員の皆様様多忙のため、一月会二月会が流会致しましたので兼題も、新年にちなんだ一月兼題の季節雑詠と、二月、三月の『早春』『桃の節句』『椿』『霞』『彼岸』と一括して選句することになりました。

石垣に 触れつ、花びら 流れけり  
しだれ咲く 桜若木に 副木あり  
散る花の集り流る 三つ七つ  
花びらの 流れに歩み 合せけり

白楊 紫杏 紫杏 白楊

(第十四回) 於 協会事務所

三月十一日(金)

兼題

幹事 星野紫杏

書き初めの 灰舞上り 天に果つ  
内陣は 初灯りして 法話聞く  
七草の 粥は薄めの 老夫婦  
やすらぎは 手を合わすのみ 彼岸婆々  
蹲に 一花とどめり 寒椿  
春雪に 雀ふくらみ 枝に群れ  
暮仇を 霞の里に 訪ねけり  
春を呼ぶ 雨にしあれば 急かすとも  
春雨に 橋も擬宝珠も 濡れるま、  
人恋し 裏参道の やぶ椿  
赤提灯 にぎわふ止り木 春の雨  
春浅く さす傘の柄の つめたさよ  
遺跡掘る 淀の城跡 春の雨  
落ちてまた なお愛でられし 落椿  
桃の日や 官女と並ぶ 紙の雛  
焼香の 列にわびしき 白椿

景流 景流 景流 生雄 一義 紫杏 一義 生雄 生雄 紫杏 景流 生雄 生雄 生雄 四朗

(第十六回)

於 協会事務局

六月十日(金)

五月に開催予定で五月にちなんだ兼題が出されていましたが、諸般の都合で例会は六月になりました。既に投句による参加もありましたので、題はそのままで実施致しました。

兼題『若葉』『青葉』『燕』『衣がえ』

幹事 久保白楊

海に降る 卯の花腐し 訃報聞く  
仁王門 出づれば花舗に かきつばた  
巢作の 燕かばいて 灯消し  
捨敷に 皮脱き終えて 竹生る  
つばめまた 地を這うように 通りぬけ  
鐘楼に 一願かけて 柿若葉  
参道は濃さも淡さも みな若葉  
燕さぬ 無人の駅の 待合に  
孫いだき ひたいで割りて 夏のれん  
万緑の 雨にも匂ひ 國境  
サングラス 外せば青葉 溢れけり  
訪なえば つばくろの巢の かしましく  
賜りし 新茶は古き 器にて

白楊 白楊 景流 景流 生雄 生雄 紫杏 景流 紫杏 白楊 生雄 生雄 白楊 月耕 白楊

席題『水ぬるむ』

塵芥 浮き沈みして 水ぬるむ  
水ぬるむ 霞の向うに 夕日落つ  
水かけの 不動の肌や 水ぬるむ

紫杏 陵南 景流

(第十五回)

於 永観堂 哲学の道

四月十五日(金)

幹事 吹ノ戸月耕

今年には桜の開花が例年より一週間程遅れましたので、予定の吟行には丁度染井吉野が満開で、同時にしだれ桜も開花し、当日は微風快晴のすばらしい午後のひとときでした。

永観堂に集合して、哲学の道を銀閣寺まで散策し、永観堂に引返して山内塔頭の一室をかりて句会を開くことが出来ました。

兼題『菜の花』『すみれ』『入学』季節雑詠

野佛の 影に供して 咲くすみれ  
客去んで 酒の冷えたる 臍かな  
菜の花の 覆いつくすや 昼の丘  
街路樹の 根元にすみれ 弱々し  
『吟行』  
花陰の 雪柳にも 散り吹雪く  
これまでと 競い咲きたる 花の道  
山門の 仁王見ている 初桜  
和尚留守 万朶の花の 庭廣し

生雄 白楊 松蔵 松蔵 白楊 生雄 生雄 白楊 生雄 白楊



俳句同好会参加者

大和電設工業 榎谷 四朗  
㈱淀電機水道工業所 田中 生雄  
同和電工 林 治吉  
㈱オリヂナル電設 石崎 陵南  
光星電工 久保 白楊  
東海電気工事 新谷 景流  
長谷川電気 長谷川松蔵  
㈱トモエ屋 星野 紫杏  
京都府電気工事工業組合 三木 一義  
事務局 吹ノ戸月耕